



TITLE:

相互利用書の現状 - その分析と今後の課題 -

AUTHOR(S):

福島, 啓介; 小花, 洋一

CITATION:

福島, 啓介 ...[et al]. 相互利用書の現状 - その分析と今後の課題 -. 静脩
1974, 11(2): 3-6

ISSUE DATE:

1974-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36729>

RIGHT:

近藤禧禎男掛長(医学図書館) 日本医学図書館協会賞を受賞

協会賞受賞の対象となったのは「『東京医事新誌』明治初期の医学雑誌についての考察」である。氏の論文は、当時、我が国における漢方医学あるいはドイツ系医学が受け入れられている状況下にあつて、英米系医学を標榜して出発した「東京医事新誌」を通じて、明治初期の医学および医学雑誌

誌の歴史的、書誌的解明を多角的に多数の文献を駆使しながら、綿密に分析され、その結果として、それが医学雑誌に及ぼした影響その他について詳述されている。これは、初期の医学文献ならびに医学史に対する関心を、読者に改めて示唆する論文として高く評価されたものである。

相互利用書の現状 — その分析と今後の課題 —

数理解析図書室 福島啓介 小花洋一

1. はじめに

現在、京都大学図書館(本館・学部・研究室 etc.)において、利用者の希望する資料(図書・雑誌 etc.)をすみやかに提供するための一つの手段として、図書館間の相互利用書の使用がある。そしてその使用法については、過去の「静脩」v. 8, No 2 (1971):「図書相互利用書」の使用について、あるいはv. 10, No 2 (1974):「相互利用書の使用法について」に記載されている。ところが相互利用書の様式が統一され使用され始めて以来すでに3年の歳月が流れているにもかかわらず、その使用に関する利用状況や分析等の報告は、いまだになされていない。その意味で数研における相互利用書の利用状況から、その存在意義と分析の必要性が導き出されれば本望である。

2. 数研における相互利用書の利用状況

分析に先立ち利用者と資料の2つの観点から以下の5つの項目により分析を進めていきたい。①利用者(階層)②種類(文献)③返却日④学部・学科・研究所別⑤数研からの利用(①~④は他部局→数研利用であるが⑤は逆に数研→他部局利用

である)なお①~③は全体の分析であり④はさらに詳しくそれら进行分析している。(期間:昭和43年12月~昭和49年10月)

① 利用者(階層)

表 1

身分 項目		P	Q	L	A	D	V	G	O	T
K	件数	125	182	75	525	1608	132	189	729	3565
K	利用	4	5	2	15	45	4	5	20	100
T	者率	%	%	%	%	%	%	%	%	%

P:教授 Q:助教授 L:講師 A:助手
D:院生 V:研究所 G:学生 O:その他
T:計

①の表より院生の利用が45%でいちばん多く、次にその他20%,助手15%,助教授・学生5%とつづいてゆく。ただしその他に関しては、附属図書館の利用(他大学等からの文献複写依頼による)がほとんどで他に事務官・技官などが含まれている。

② 種類（文献）

表 2

種類 項目		B	J	O	T
S	冊数	847	4086	136	5070
S T	貸出 等	17%	80%	3%	100%

B：図書（単行本） J：雑誌 O：その他
T：計

②の表より貸出冊数の80%が雑誌でいちばん高く、数研の蔵書構成の上で雑誌の示めす役割の重要性を再認識した。次に図書17%，その他3%であった。ただしその他に関しては雑誌，図書以外のもの（二次資料・プレプリント，レクチャー・ノート等のインフォーマルパブリケーション類）や判断のつきにくいものを含めている。

③ 返却日

表 3

返却日 項目		OK	W	2W	M	O.M.	T
S	冊数	4343	607	56	24	40	5070
S T	返却 等	85.6%	12%	1.1%	0.5%	0.8%	100%

OK：期限内返却 W：一週間遅れ
2W：二週間遅れ M：1ヶ月遅れ
OM：1ヶ月以上遅れ

③の表により期限内（「相互利用書」の使用についてより図書は文科系二週間，自然系一週間，又雑誌は共に三日間）返却率85.6%それ以外は14.4%であった。その中でも期限日より1週間以内の返却率が最も高く12%を示した。返却率を高める第1歩としてこのWを0%にする事，そのためにはカウンターに出ている掛員の利用者へのきちっとした利用オリエンテーションによって解消したい。

④ 学部・学科・研究所別

表

4

所 属 項 目		理 学 部						工 学 部										基礎 研	大型 計	農学 部	原エ ネ研	附属 図	その 他	T
		数学	物理	応用 物理	化学	その他	T ₁	建築	数理 工学	情報 工学	電気 系	土木 系	機械 系	化学 系	その他	T ₂								
K	件 数	108	370	97	146	10	731	187	646	86	369	109	78	99	118	1692	60	91	251	60	562	118	3565	
K T	%						20 %									47 %	2 %	3 %	7 %	2 %	16 %	3 %	100 %	
S	冊 数	164	483	127	182	22	978	283	887	198	546	159	147	153	163	2536	72	134	370	175	635	155	5070	
S T	%						19 %									50 %	1 %	3 %	7 %	4 %	13 %	3 %	100 %	
S K	数冊 人	1.51	1.30	1.30	1.24	2.20	1.33	1.51	1.37	2.30	1.47	1.45	1.88	1.54	1.38	1.49	1.20	1.47	1.47	2.91	1.12	1.31	1.42	
H	期限日 以内返却	151	378	122	166	10	827	237	802	169	484	153	131	125	144	2245	55	87	296	141	596	96	4343	
H S	期限内 返却率	92 %	78 %	96 %	91 %	45 %	85 %	84 %	90 %	85 %	87 %	96 %	89 %	82 %	88 %	89 %	76 %	65 %	80 %	81 %	94 %	62 %	86 %	

（但し理学部，工学部の学科及び学部，研究所で件数50未満のものはそれぞれのその他の欄に入れた）

④の表により貸出件数の最も多い学部は、工学部 47 % で次に理学部 20 % , (附属図書館 16 %) , 農学部 7 % , ……さらに詳しく学科についての貸出冊数は、数理工学 887 冊を 1 番として (附属図書館 635 冊) , 電気系 546 冊, 物理 483 冊, (農学部 370 冊) ……であった。又、件数と冊数の割合から個人単位の冊数が求められる。換言すれば相互利用書一枚につきいくつの要求する資料が記載されていたかということである。その中で最も高い割合を出したのは、原子エネルギー研 2.91 であった。以下情報工学 2.30, 機械系 1.88, 化学系 1.54, 数学・建築 1.51 ……とつづく。次に期限内返却率について③の表より全体の結果はすでにわかっているがもう一歩進めて分析してみると最もよかったものを 5 つあげてみると応用物理・土木系 96 % , 数学 92 % , 化学 91 % , 数理工学 90 % であり最も悪かったものを 5 つあげてみると大型計 65 % , 基礎研 76 % , 物理 78 % , 農学部 80 % , 原子エネルギー研 81 % であった。返却率のベスト 5 及びワースト 5 を求めたことになる。一方、件数 50 未満のものはそれぞれのその他の欄に入れたが、いったいどんな学部・学科があったかいま若干触れてみると、工学部その他の中には原子核、航空、附属施設等又その他 (全体) の中には文学部心理を 1 番に薬学部、教養部、経研、医学部、防災研、化研…… etc. があった。

⑤ 数研からの利用

①～④までは他部局→数研への利用情況の分析であったがこれだけでは一方通行になるのでここでは数研→他部局の利用を見てみることにする。まず表を書いて見ると次のようになる。

表 5

項目 項目	K	S			返却日	
		B	J	O	OK	NO
数 研	94	32	73	5	100	10
		110			110	
率	100%	29%	66%	5%	91%	9%
		100%			100%	

K : 件数 S : 冊数 B : 図書 (単行本)

J : 雑誌 O : その他 OK : 期限以内返却
NO : 期限オーバー

件数 94 件, 貸出冊数 110 冊, 期限以内返却率 91 % であり理学部の化学と同じ率になった。故に上位の中ぐらいに入ると思われる。

3. 利用情況への今後の課題

2. の相互利用書の利用情況をみることにより今後、数研が行うべきことを見出した。すなわち①利用者については特に院生、助手の利用に注意を払い、その文献の種類内容を分析し、今後のニーズに対処してゆく上の参考資料とする。②の文献の種類の内容の導びき出される対策としては次の事が考えられる。数研においては雑誌の収集により力を入れ蔵書構成の充実をはかっている。他の自然系図書室においても自館発行の相互利用書の分析により、それに対処する資料の収集において京大としての調整された蔵書構成をめざしたい。③返却日における期限を図書館員と利用者が再認識すること (貸出を行う時、受付で掛員が注意を払う) それにより返却率を上げることになるのではないか。又、返却率の悪かったところは今後とくに気を配ることである。④学部・学科・研究所別利用については利用の多い学部・学科を中心にして考えていくことと①～③の個々の対策も含めて④に対処していく。⑤数研から利用では返却率、91 % → 100 % に上げることであり、それにより他部局への信頼度を上げることになり他に対しても対処出来ると確信する。一方、数研の場合、他学部への利用の実態は、ほとんど自館が製本中のため、あるいは欠本の補充をするための利用で学術的目的は少なかった。ここでも数学は他の分野に引っぱられるが他の分野を引っぱらないことが証明されたのか？又は、あるいは資料充足率 (数研における、文献複写利用から見た資料充足率 : 87 % による) の高さのためか？

4. おわりに

数研としての収獲 (データ) と今後の努力目標及び他学部への提案として、まず第 1 に一般的に言われているように数学の被引用率の高さ？を実

際に知った今回のレポートには、その他とされている中の種々の学部・研究所等がそれを如実に示していた。又、データー分析中に face to face による情報流通パターンが見られたのは興味深い。第2にその資料分析による雑誌の重要性（予想どおりの率）を量として把握できた。そして次の努力目標としては文献（おもに雑誌）のタイトルによる利用頻度リスト等の作成により今後の利用者への利用率・充足率の向上になるのではないかと

思われる。第3に数研における相互利用書の発行数が少なかったが、身分別の利用先、及び種類を把握することにより、自館の不備を補うための参考資料となりえるのではないか。その意味で他学部の相互利用書分析を望む。第4に第1～第3などを基に、学部間の雑誌調整などが出来れば予算のとばしい現状に一つの活路を見い出せるのではなかろうか。そのためにも、他学部の相互利用書の分析を待つものである。（49年11月19日）

UNISIST 研修会に参加して

ユニシストとは：

1967年ユネスコは、世界の科学情報流通組織を機能的に確立するため、ICSU（International Council of Scientific Union）と協議を行ない、UNISISTをスタートさせることになった（1971）。ユニシスト研修会：

1974年7月15日より8月23日まで、東京、神戸で日本政府の海外技術協力事業の一環として、ユネスコの協力を得て、海外技術協力事業団（OTCA）、日本ユネスコ国内委員会、日本ドキュメンテーション協会、および神戸大学が上記ユニシスト・アジア地域研修会を開催した。

アジア地域の7か国よりの14名の参加者があったが、オブザーバーとして参加できたものとして以下簡単に感想をのべてみる。

講義および研修内容は主としてインフォメーション・ネットワーク、ドキュメンテーションに関する理論的なもので占められ、ユニシストの世界科学技術情報システムの計画等の講義がそれに加わった。その内容の個々についての詳細は、ここに記すことはできないが、全体としていえることは、アジア地域の発展途上国よりの参加者を対象としているため、インフォメーション・ネットワークの理論的な講義およびその必要性を主眼においたものである。

一般的な知識としてもっているものを、系統的

に整理する上において、講義、ディスカッションのもつ価値は大きいものがあつた。

ここで得たものをどのように生かしていくかは今後の課題であるが、過去の知識、情報の蓄積を行なってきた図書館が、カーレント・アウェアネスのみならずリトロスペクティブの面において積極的にインフォメーション・ネットワークに係わるものであるとすれば、『わが国の図書館事情は』と更めて問いなおさねばならないと思う。

1975年秋に予定されている第3回日米図書館会議のメイン・テーマが図書館協力であることから、科学情報流通機構の整備こそが図書館界において今日的な課題になっている。

わが国の図書館の多くが過去の図書館資料の中への埋没、行政組織上の未発達等の諸問題の重荷を、どうにかもちこたえるのに精一杯の感じもしないでもない現在、科学情報流通のシステム化を理論的には必要としながらも、現実には、当面する問題に追われているのではないだろうか。

広く世界的な視野より情報流通の理念に立ち、更めて図書館機構、組織を検討することにより、内部的な諸問題の解決の方向を見出すことも図書館の近代化につながるであろうと、今回研修会に参加して得た感想の一つである。

（教育学部図書室 辻 武夫）